中国英傑伝

海音寺潮五郎

呉の権臣、伍子胥の策略によって闔廬が呉王となったころ、楚から呉に伯嚭が亡命してきた。楚に父を殺された伯嚭は、楚を恨み、呉によって復讐しようと考えて来たのである。その伯嚭を伍子胥は受け入れ、大夫に推薦する。

闔廬は伯嚭を受け入れて、大夫とした。

子胥は伯嚭が自分と境遇を同じくし、志を同じくしているので、最も親しく交際し、闔廬へもよくとりなした。恐らく、闔廬が伯嚭を大夫にしたのも、子胥のこのとりなしによるのであろう。

その頃のある日、呉の大夫の一人披離という者が、子胥を自宅に招待して宴をひらいたが、宴後、客の散じつくしたあと、声をひそめて、子胥に言った。

「卿は伯嚭殿とずいぶん親しくしておいでのようでござるが、何かわけありげな相手の様子をいぶかしく思いながらも、子胥は、何か特別なわけがあるのでござるか。」

「拙者は楚に父と兄とを殺され、伯嚭は父を殺されています。ともに亡命の客臣です。境遇も同じです。卿は船乗り共が、櫂を同じくしているわけです。立場を同じくしていますでありませんか。水上で歌っている、こんな唄をお聞きになったことはあ

胸痛めば、胸やむ人のいとほしく
貧しければ、貧しき人のいとほしく
おびえ立つ鳥は、ともに飛び立ち
同じ瀬に集まり
同じ瀬にともに流さる
胡馬は北風にいななき
越鳥は南に向かひて巣くふ
人は皆われに似たるを愛し
同じことを思ふをいとほしむ

（同病相憐れみ、同憂相救ふ、驚翔する鳥は相随ひて、瀬下の水に集まり、因つてまた倶に流され、胡馬は北風を望みて立ち、越燕は日に向かひて熙ぶ、誰かその近き所を愛せざらんや、その思ふ所を悲しまざらんや。）

これが拙者の伯嚭にたいする気持ちです。」

披離は憮然とした様子になったが、なお言う。伯嚭は警戒すべき人物のように、拙者には見えます。」

「ごもっともです。しかし、拙者は貴殿のためになお申したいと。

「どう警戒せよと言われるのでしょう。」

「あの人は鷹のような目をし、虎のごとき歩きぶりをします。拙者の経験では、こんな人間は功名心旺盛で、残忍で、功を独占し、殺を嗜む性質があります。」

「そうですか。しかし、拙者にはそう見えません。」

子胥は承服せず、益々親しみ、闔廬にとりなして、重く用いさせたと、呉越春秋は伝えている。

披離の忠告はあたっていたのだ。ずっとずっと後年、子胥はそれを思い知るのである。